一カ月後

順調だった旅が思わぬ強敵で
足止めをくらう羽目になった。
この地域に多く生息する
物理攻撃に強いモンスターだ。
これには流石のグスタフの攻撃でも大した
ダメージを与える事が出来ず、
僕や母さんの攻撃呪文では力不足の為、
数体を倒すのがやっとだった。

これ以上先へ進めないと判断した僕達は
一度、近くの村で休息をとる事にした。
こんな時こそ、僕が何とかしないと…
そう思ったが、現状僕の最高攻撃呪文はギラ。
母さんのバギクロスには遠く及ばない。
加えて、そのモンスターにはバギ系の耐性があるらしく、
攻撃呪文がバギ系しかない母さんではどうにもならない。

ここより先へ進む為、
僕が出した結論は魔法使いを
仲間に加えるというものだ。
運よく休息に訪れたこの村に
強い魔法使いがいるとよいのだが…。
翌日、僕らは手分けして
村で魔法使いを探す事にした。

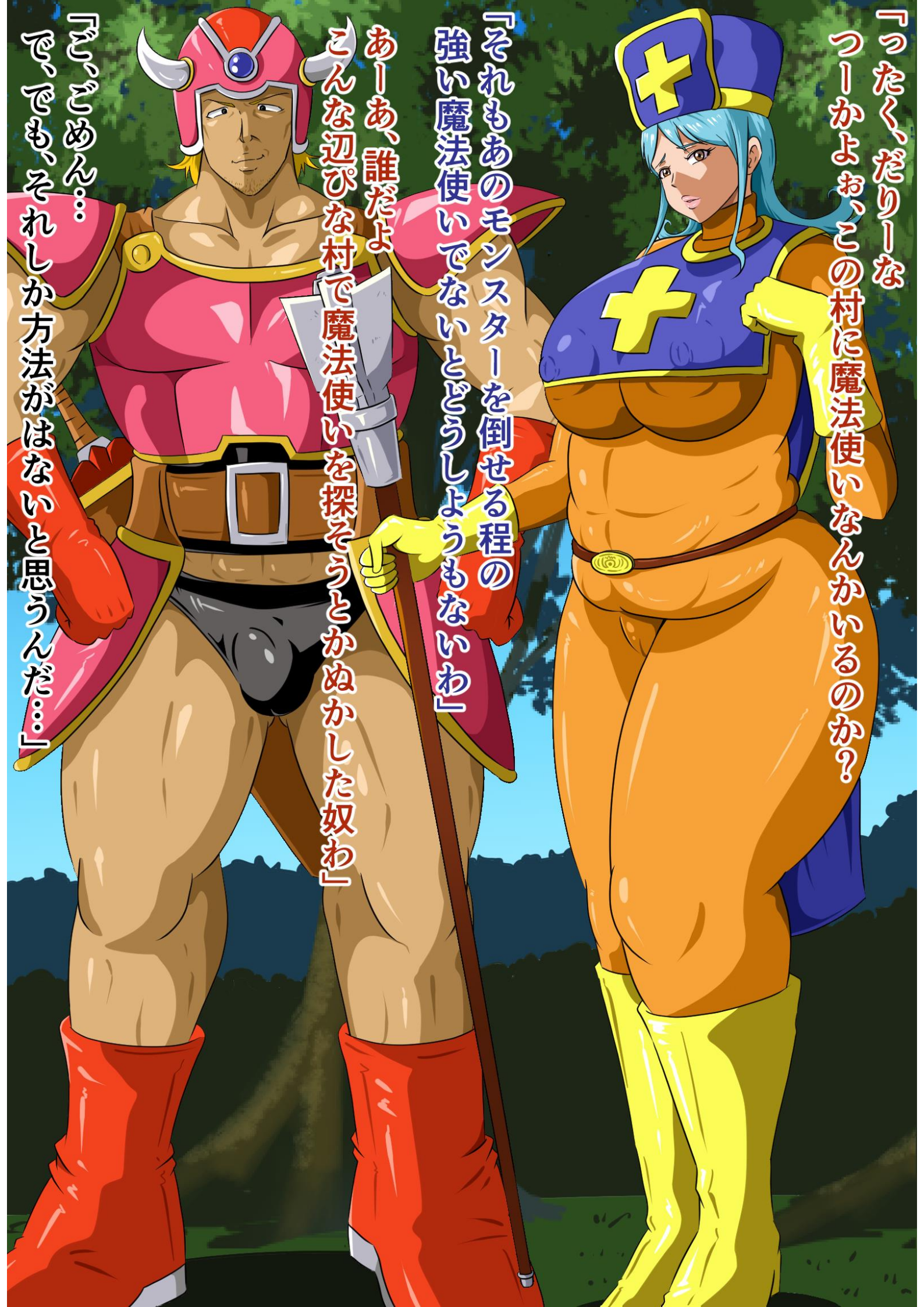
…そして、僕にはもう一つ気になる事があった。
母さんのグスタフに対する対応だ。
旅が始まったばかりの頃は気を使って遠慮気味だったが、
最近では村に居た頃以上にきつくあたる時がある。
グスタフはそれを意に介してはいない様だが、どうにも気になる。
僕の知らぬ間に母さんはグスタフから嫌がらせでも
受けているのではないのだろうか？
いや、逆らえないのをいい事に僕が考えているより酷い目に
あわされているのではないだろうか？
相手があのグスタフなだけに変な想像をしてしまう。

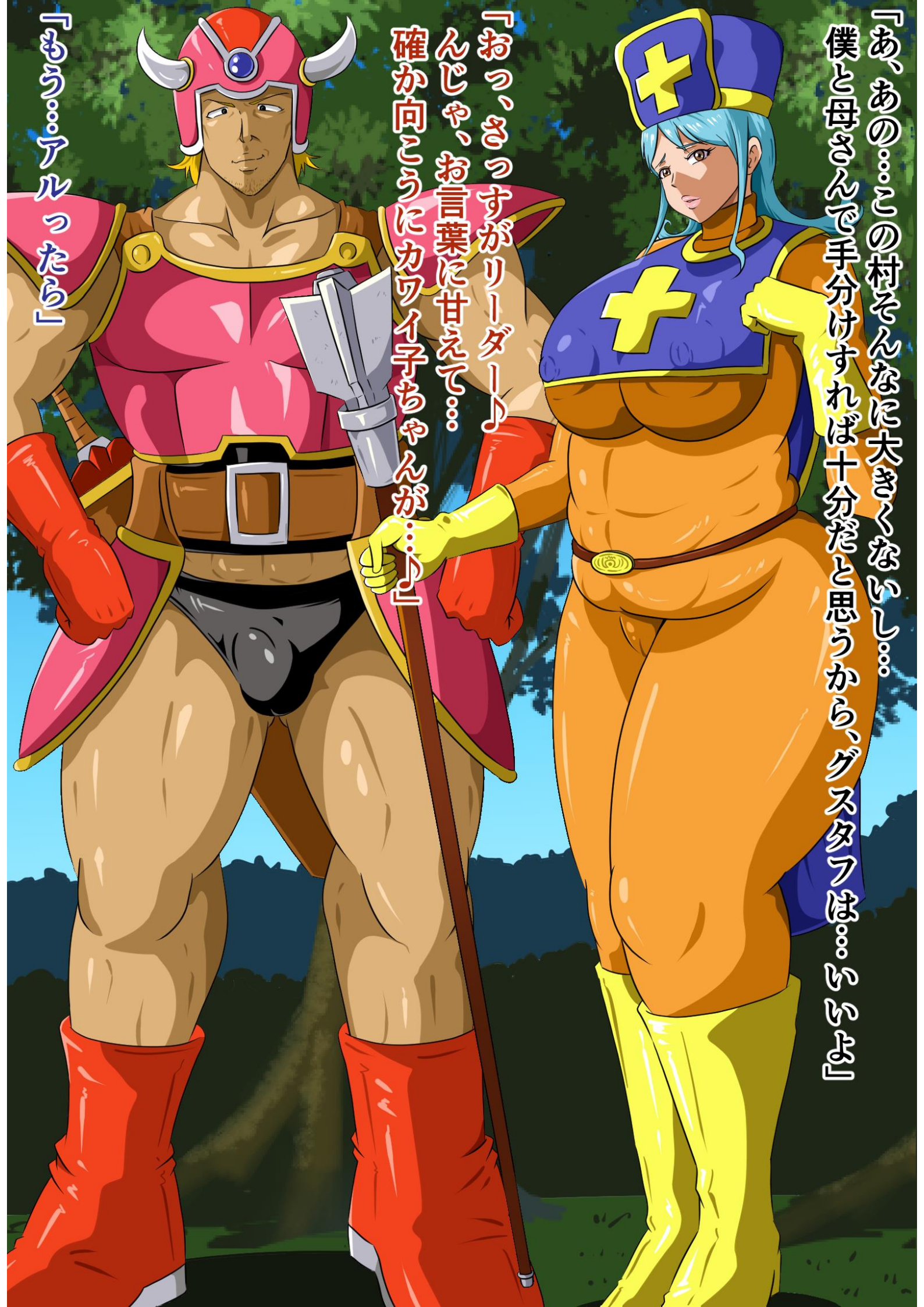
…いくらグスタフでも同じパーティの仲間に変な事はしないか。
ましてや、母さんにだなんて…

正直、息子の目から見ても母さんは綺麗な女性だとは思うが、
もう若くはない立派なおばさんだ。
女好きで有名なグスタフでもそんな母さんを
相手にするはずがないか。

いずれにしても、グスタフに対する母さんの対応は気になる。
タイミングを見計らって、まずは母さんにそれとなく聞いてみよう。

翌朝


「ったく、だりーなつーかよぉ、この村に魔法使いなんかいるのか？
「それもあのモンスターを倒せる程の強い魔法使いでないとどうしようもないわ」
あーあ、誰だよこんな辺ぴな村で魔法使いを探そうとかぬかした奴わ」
「ご、ごめん…で、でも、それしか方法がはないと思うんだ…」


「あ、あの…この村そんなに大きくないし…
僕と母さんで手分けすれば十分だと思うから、グスタフは…いいよ」
「おっ、さっすがリーダー♪
んじゃ、お言葉に甘えて…
確か向こうにカワイ子ちゃんが…♪」
「もう…アルったら」

「ま、まぁいいじゃない
グスタフにはいつも助けて貰ってるしさ
「それはそうだけど…あなたはリーダーで勇者なんだから
向こうの方が強くてもビシッと言わなきゃ…
ごめん…そう言えば母さん、最近グスタフと何かあった？
遠慮はしている様だけど、はじめの頃よりあたりが
厳しいっていうか…割と強めに文句言ってるよね？」
えっ？
そ、それは…」

「それはアルみたいにお利口じゃないから、ついね…
今だって仲間探しを面倒臭がって、
おまけにあれは可愛い子目当てにナンパでもしに行ったに違いないわ
ほんと、アルとは大違い…やっぱり母さん、あの人は苦手だわ
「本当にそれだけ？
グスタフに何か変な事とかされてない？」
まぁ、アルったら…心配してくれてありがとう
でも、大丈夫よ」

「それにもし彼が変な事をしてきたとしても
母さんはちゃんと嫌って言えるから…
だから心配する事ないわよ
確かにグスタフには
このまま仲間にいてもらいたい手前、
多少遠慮はしてしまうけど、
駄目な事はちゃんと駄目って言うわ」
「そうだよね…うん、分かった
母さんなら大丈夫だよね」

「もう変な心配しちゃって
大体、母さんがそんな軽い女に見える？
「母さんが父さん一筋なのはよく知ってるよ
それに母さんは軽い女じゃない…ずっしり重い女だよ
ほら、この辺についてるお肉とかお尻もすごーく重そうだ
こら、お利口っていうのは撤回
許さないわよ、アル」
ははは、ごめん」
（そうだ、母さんなら心配いらない
母さんは強い人だ、僕の尊敬する自慢の母なんだ）

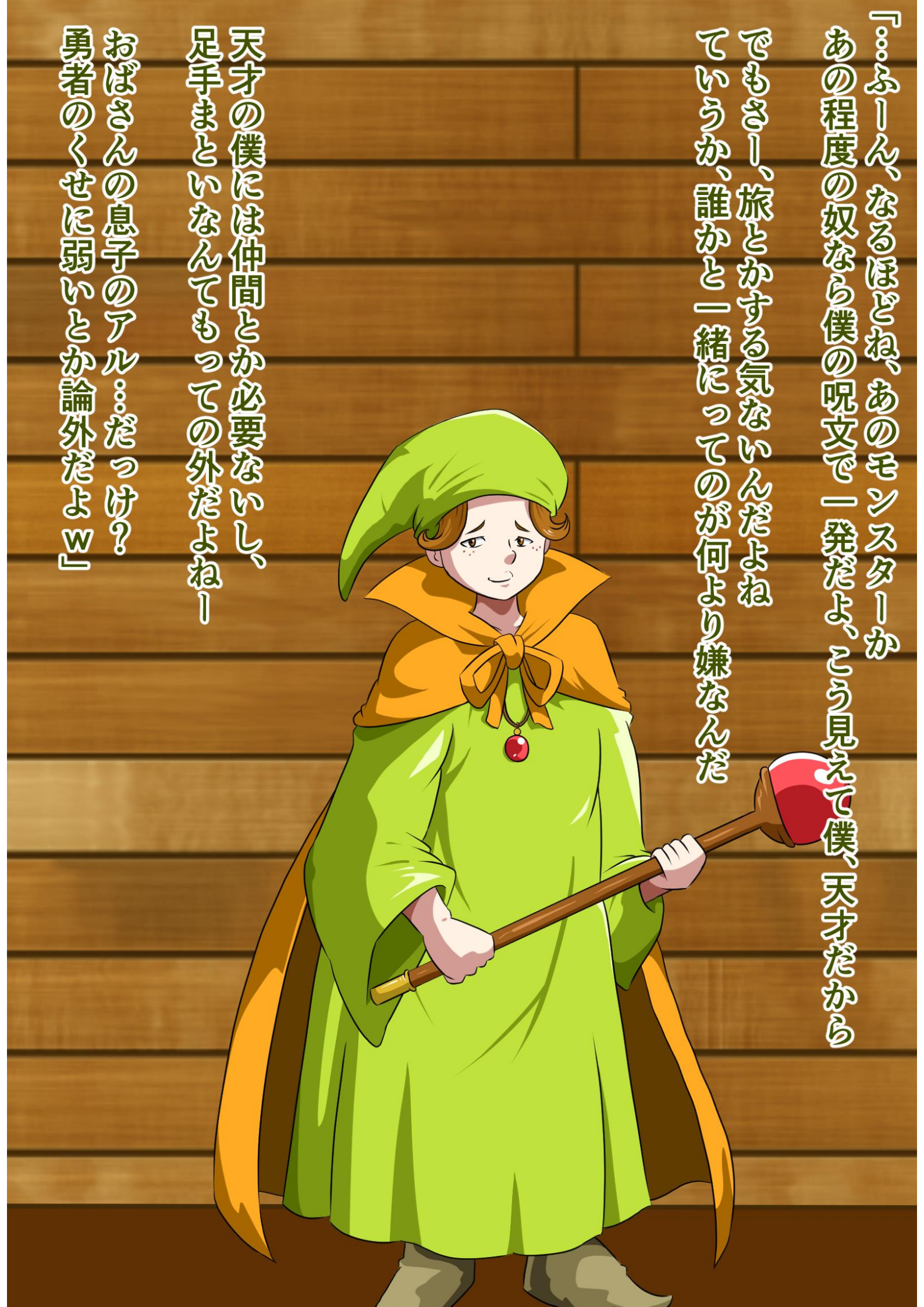
「それじゃあ、手分けして新しい仲間を探しに行こうかしら
「うん、この先に進む為…何としても強い魔法使いを探そう
僕は東側を、母さんは西の方をお願い
一度、お昼になったらここへ集合しよう」
ええ、分かったわ」
こうして、僕と母さんは魔法使いを探し始めた。
新たな仲間…その人物がこの村にいると信じて…。

アルと別れて一時間程経った頃、村の人から魔法使いがいるという情報を得た私はその人物の自宅へと向かいました。

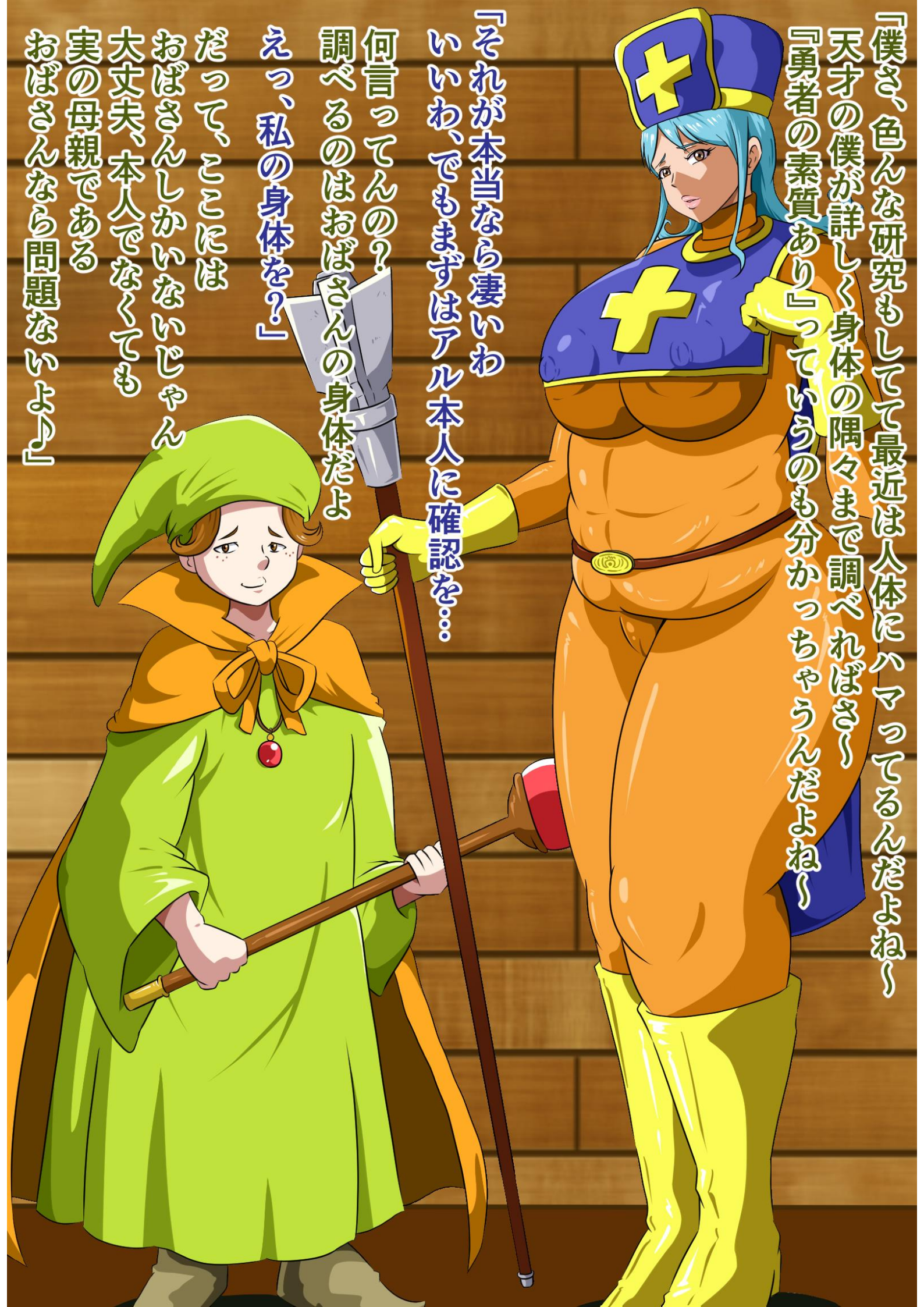
その人物の名はキッド
何でもまだ年端のいかない少年だという話ですが、
この村きっての天才児だというのです。

極度の人嫌いであるその少年は人里離れた場所に
一人で暮らしているそうです。
少し不安もありますが、
何とか説得して仲間に加わって貰わなければ。

キッドの自宅へたどり着いた私を彼は特に嫌がる様子もなく
すんなり家の中へ招き入れてくれました。
どうやら私の取り越し苦労だったみたいです。


「…ふーん、なるほどね、あのモンスターか
あの程度の奴なら僕の呪文で一発だよ、こう見えて僕、天才だから
でもさー、旅とかする気ないんだよね
ていうか、誰かと一緒にってのが何より嫌なんだ
天才の僕には仲間とか必要ないし、
足手まといなんてもっての外だよねー
おばさんの息子のアル…だっけ？
勇者のくせに弱いとか論外だよw」

「アルが弱いのは事実よ…だからこうしてあなたを仲間に誘っているわ
でも、アルはいずれ勇者として立派に成長して
いずれ魔王を倒し世界に平和をもたらしてくれるわ
「勇者なんだから、そうでないと
困るけどおばさんの息子じゃ
どうにも不安だなー
そ、それは…
信じてもらうしかないわ
だったら、本当に
そんな実力を
秘めてるのか
僕に確かめさせてよ」
確かめるって
一体どうやって？」


『僕さ、色んな研究もしてて最近は人体にハマってるんだよね～
天才の僕が詳しく身体の隅々まで調べればさ～
『勇者の素質あり』っていうのも分かっちゃうんだよね～
「それが本当なら凄いわ
いいわ、でもまずはアル本人に確認を…
何言ってんの？
調べるのはおばさんの身体だよ
えっ、私の身体を？」
だって、ここには
おばさんしかいないじゃん
大丈夫、本人でなくても
実の母親である
おばさんなら問題ないよ♪」

「成程、そうなのね…で、でも…」
「でも…何？大丈夫だよ、痛い事はしないから」
（まさかこんな小さい子に限って…
だけど、何か嫌な予感がするわ…
でも、アルを調べて万が一
勇者の素質なしだなんて
言われたら…
それなら私が
調べられる方が…
仮に素質なしだったとしても
アルは知らないで済むわ）

「分かりました
それじゃあ、私を調べて頂戴
「よし、決定だね
それでアルに素質ありだと
確信出来たら仲間になってくれるのね？
まぁ、そうだね～
群れるのは好きじゃないけど
本物の勇者となら、まぁ…
それにおばさんも
一緒なら退屈しなそうだし…ｗ
いいよ、仲間になってあげる」
ありがとう、キッド」

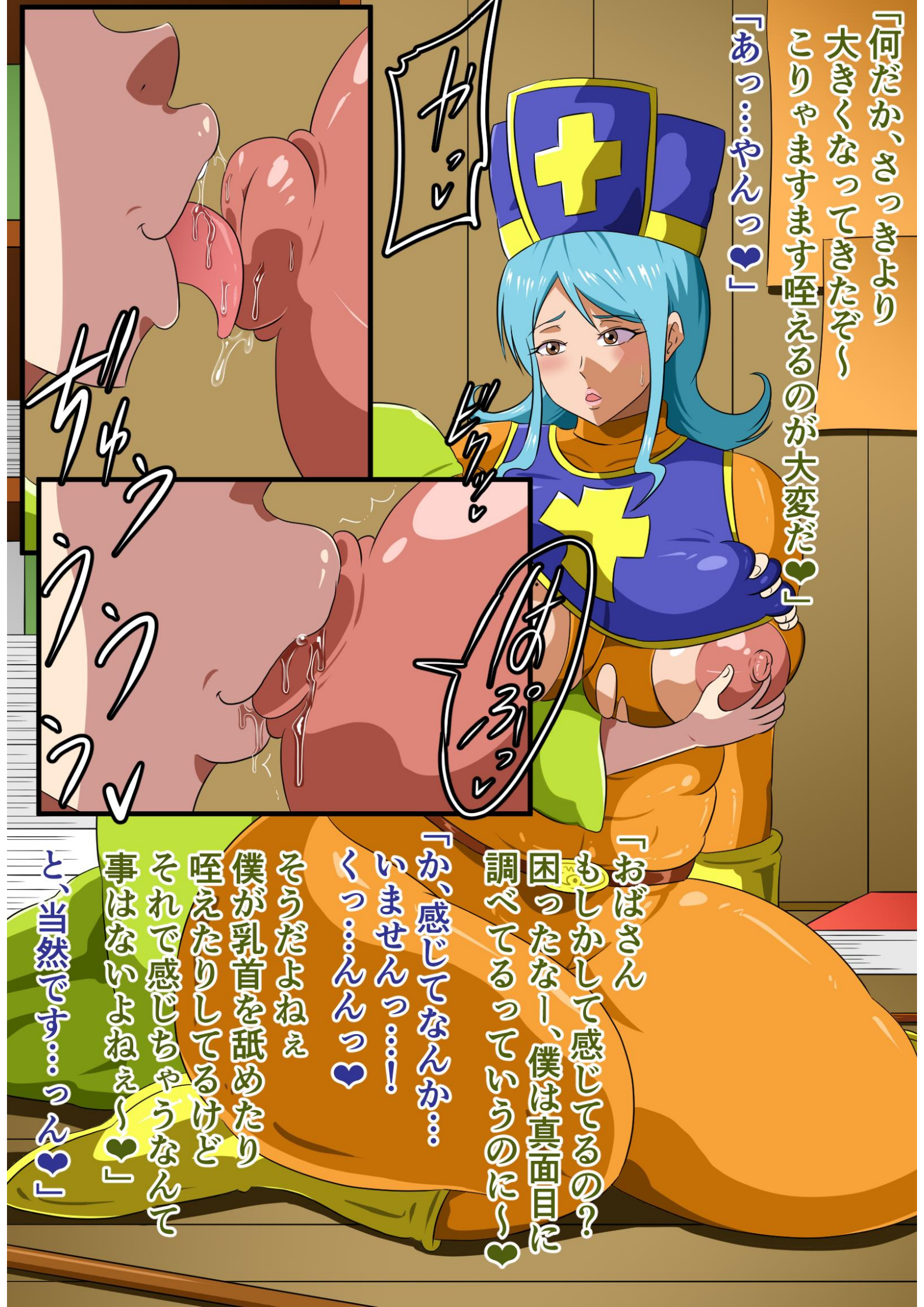
「それじゃあまずはおっぱいだよ
ほら、さっさと出してよ
「えっ!?
お、おっぱい!?
うん、そうだよ
おばさんのその大きな胸を
僕がじっくり調べるんだよ
調べるってどんな風に…?
始めれば分かるよ
いいから、早くして
僕は気が短いんだ」
わ、分かったわ…
ど、どうぞ調べて頂戴…」

「何だよおばさん
タイツを脱いでくれればいいのに
おっぱいのとこだけ破くなんてさ～
「仕方ないでしょ
脱いだら裸同然になってしまうもの…」
僕はその方が調べ易いんだけど…
まぁ、こういうのもアリか♪」
もみゅ♡
むにゅうう♡
ちゅっ♡
くちゅ♡

「そ、それでどうかしら？
何か分かったの？
「まだ始めたばかりだよ？
そんなすぐ分かる訳ないでしょ？
そ、そうよね…
おばさん、乳首大きいね
これじゃあ咥えるのも
一苦労だよ～♪
ごめんなさい
大きいと調べ辛いのね…」
そうだよ、だからちょっと時間
掛かっちゃうかもしれないね～♪」
ちゅぱ
ちゅぱ
ぷにゅっ
さわ
さわ

「んっ…あっ❤」
「何なのこれ
ほんとにおっき乳首だなぁ❤」
ビクッ
ベロキーン
「こんなに大きいなんて普通じゃないね
という事は、この乳首を調べれば
勇者の素質があるかどうか分かるかも❤
「ほ、本当…？
私の乳首でそんな事が分かるの…っ？」
まぁね
その為にももっとよく調べないとね❤」

「あっ…ん…くぅ…❤
「変な声出しちゃって
おばさん、どうしたの？」
な、何でもないわ…っ」
ビクッ
ビクッ
ベロ
ベロ
ベチャ
ベチャ
「くすぐったいのかな？
でも、我慢してよね
遊んでる訳じゃないんだからさ～❤
「え、えぇ…分かっているわ…っ
っつ❤んっ…あ…あぁ…❤」
そうそう
我慢だよ、おばさん～❤」


「何だか、さっきより
大きくなってきたぞ～
こりゃますます咥えるのが大変だ❤」
「あっ…やんっ❤」
カッ
ビクッ
ぱぷっ
ちゅうう
「おばさん
もしかして感じてるの？
困ったなー、僕は真面目に
調べてるっていうのに～❤
「か、感じてなんか…
いませんっ…！
くっ…んんっ❤
そうだよねぇ
僕が乳首を舐めたり
咥えたりしてるけど
それで感じちゃうなんて
事はないよねぇ～❤」
と、当然です…っん❤」

「うひょー❤凄いぞ、この乳首
引っ張るとこんなに伸びるんだぁ❤
「あっ…やん❤
ちょ、ちょっと…っ❤
伸縮性と強度を
調べてるんだから
我慢してよねぇ❤
そ、それが勇者の素質を
知る事とどう関係が
あ、あるの…っ？
説明すると長くなるからなぁ
まぁ重要な調べ事だから、ね？」
そ、それなら我慢するけど…んっ❤」
ガシッ
ビクン

「僕だってさー好きでこんな事してるんじゃないんだよ？そこは理解してよね❤
「え、えぇ…真面目に調べているんですものね…
もう少しでおっぱいは調べ終わるからさ～❤
へ、平気よ…っ
私が我慢すれば…
い、いいんだからっ…あん❤」
流石、大人だね♪」
ぐっ
ぐいぐいぐいぐい
ぐいぐいぐいぐい
にっ
にっ

（キッドにやましい気持ちはないのよね？
大体、こんな小さい子がそんな事…ある訳ないわ…
ん…♡
ニコ♡
ニヤ♡
ニヤ♡
フーッ♡
フーッ♡
いやらしい顔にも見えなくはないけど…
やましいとかでなくて、純粋にこのくらいの年の子は
みんなおっぱいが好きだったりするし…
キッドもそうなだけに決まっているわ…）